

# 北海道企業局工業用水道事業経営懇談会議事要旨

## 【開催要領】

- 1 開催日時：平成30年7月19日（木）13:30～15:00
- 2 開催場所：北海道企業局会議室（道庁別館10階）
- 3 出席者：（座長以外の構成員は五十音順）
  - 座長：村上 淳（北海道総合商事(株) 事業戦略部長）
  - 構成員：荒川 溪（北海道大学公共政策大学院 准教授）
  - 構成員：柄澤 高雄（北海道経済連合会 産業振興グループ 部長）
  - 構成員：河野 明美（(株)キューブコーポレーション 代表取締役）
  - 構成員：谷口 雅子（谷口雅子公認会計士事務所 所長）

## 【次第】

- 1 開会
- 2 議事
  - (1) 「北海道企業局工業用水道事業経営懇談会開催要領」について
  - (2) 「北海道企業局工業用水道事業経営懇談会」の取組状況について
  - (3) 各工水（室蘭・苫小牧・石狩）における「契約水量の動向」について
  - (4) 「北海道工業用水道事業経営健全化計画」の進捗状況について
  - (5) 平成30年度「当初予算の概要」について
  - (6) 平成29年度「需要開拓促進年間行動計画」の取組結果について
  - (7) 平成30年度「需要開拓促進年間行動計画」について
  - (8) 「工業用水道施設見学会（苫小牧地区・石狩湾新港地域）」について
  - (9) 道営工業用水道「供給開始50周年」を契機としたPRについて
  - (10) 「工業用水道施設の耐震診断」について
  - (11) 「室蘭地区工業用水道第三期改修事業」について
  - (12) 「苫小牧地区工業用水道第二期改修事業」について
  - (13) 「道議会決算特別委員会等」での議論について
  - (14) 「北海道企業局経営戦略」の策定推進について
- 3 その他
  - (1) 「工業用水需要開拓促進連絡会議」（平成30年5月28日開催）での議論について
  - (2) その他
- 4 閉会

## 【意見等要旨】

事務局より資料の説明後、各構成員から次のとおり意見等があった。

### 「北海道工業用水道事業経営健全化計画」の進捗状況について

- 石狩工水は、平成18年度に未稼働資産等の整理を行い施設規模を縮小し運営しているが、一般会計からの長期借入金が多額であるなど、事業としては成り立っておらず、非常に厳しい経営状況。中長期的には施設の修繕や施設改良などで多額の追加費用が必要となることから、事業を継続するかどうかを見据えた議論を展開していかなければならないとの印象を受けた。
- 石狩工水は、工業用水の需要が増加してもペイするのかが不透明な部分もあるが、一般会計からの借入が止まれば立ちゆかなくなる、そのリスクは道民が背負っていると理解した。大きなリスクとして、施設の維持更新費用の負担があると認識しているが、それがどの程度の額となるのか明らかにしなければ、存廃を含めた議論が始まらないと思う。もう一つは企業の撤退リスクであり、この懇談会でも今後考えていかななくてはならない。
- 石狩工水は、大都市に近く、今、エネルギーの基地になりつつあり、ポテンシャルが高いとも言える。ただし、今後の修繕などの見通しや考え方について、今後議論する必要がある。

### 平成29年度「需要開拓促進年間行動計画」の取組結果等について

- ビジネス交流会等に出展している企業のブースを訪問し営業活動を行っているが、既受水企業との関係強化のほか、新規需要開拓のためのコアな声掛けの機会でもあることから、是非、営業を中心に行ってほしい。また、イベントに出展する際には、どのような業種の企業に何件PRするかといった目標設定を明確にする必要がある。
- PRグッズに関して、エコバッグやボールペンは一般の消費者には人気がないことから、資源ごみとして出せる紙製バッグにするとか、ノック部分にキャラクターをあしらうなどの工夫を凝らした方が良い。クリアファイルは複数あっても重宝されるが、現在の物のように中身が見えないと使い勝手が悪いので、図柄を下の方にあしらうなど、受け取る方の満足度向上を意識し、費用対効果も考慮して工夫すべき。
- 需要開拓に当たっては、工業用水を使用する可能性のある業種をターゲットとすることが有効と考えており、業種ごとに企業に売り込む際のセールストークをパターン化するなど、ノウハウを蓄積した「虎の巻」のようなものがあると、人事異動により職員が替わっても、効果的な営業活動が可能となる。

- 札幌市内の食品加工業者で、住宅地になってしまったので移転を考えているケースも結構あるので、そういったところへの営業も検討する価値がある。
- マーケティングの目的は売り込みだけではなく、ユーザーから「どのようなところに工業用水が使えるのか」という情報を収集し、アプリケーションを蓄積していくのも一つの目的である。予断を持ってターゲットを絞り込むのではなく、民間の柔軟な発想も取り入れられるよう、何があるか取りあえず当たってみるのも一つの手である。